

日本記者クラブ会報

施設運営委を設置

新執行部活動を開始

五月の総会で選出された第六期（昭和五十八、五十九年度）の役員による実質的には初めての理事会が、新井理事長を議長として六月二十七日午後、クラブ大会議室で開かれた。この理事会で、クラブの各種施設の管理、運営ならびにサービスの向上

をはかるため、あらたに施設運営委員会を設置することが決定され、同委員長に小林淳宏理事（時事通信社取締役経理担当）を委嘱することとなった。

当クラブが日本プレスセンタービルの九階に居を構えて以来、今月末

理事会に先立って同日総務委員会（委員長 渡辺襄理事）が開かれ、前期理事会から申し送りのあった当ク

創立当初の功労者や元理事長などに對して、クラブとしての遇し方を検討すべき時機にきているのではない

功労者の処遇を検討

総務委員会

クラブの功労者に対する処遇についての審議にはいった。来年十一月には当クラブも創立十五周年を迎えるが、

かというところから、総務委員会で具体案を練ることとなったものである。

第161号
1983年
7月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
プレスセンタービル9F 電話100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話五〇三一二七二二（代）

で満七年になるが、その間に会員数は八百三十六名から千九百六十九名へと二・四倍に増加し、諸事業もますます活発化して、既存の諸施設も手ぎまとなりつつある。大小の会議室や宴会場などは、希望の日時がとれないほど利用されてきている。こうした貸室の状況や、食堂、バーのサービス、新聞・雑誌・図書や映像用、複写用の機器類などについても総合的な検討を加えて、会員サービスの改善をはかるのが新設の委員会の目的である。

同委員会の構成については、小林委員長を中心に入選を進め、七月中にはその第一回の会合が開かれる予定である。

なお六月中には、新たに委嘱された委員を迎えて、既存の各委員会が相ついで開かれたほか、新執行部は新設の施設運営委員会をも加えて、意欲的にクラブ運営のための活動を開始した。

笠置事務局長の任期

明年五月の総会まで

笠置事務局長は前期理事会にも「本年八月十五日で満六十五歳となり、内規による任期を満了することとなるので、後任者を任命してほしい」と申し出ていたが、六月二十七日開催の理事会でも重ねて同様な申し出を行った。同日の理事会はこの件を追加議題として審議したが、その結果、今期役員による執行部は発足したばかりであり、後任者を選び、かつ事務引き継ぎを円滑に行うためには、ある程度の時間が必要であるなどの理由から、この際、内規の解釈の範囲内で、笠置事務局長の任期を昭和五十九年五月の通常総会までとすることに決定した。

七月一日現在の会員状況

法人会員	一四四社
基本会員	六二九人
個人会員	一、〇八一
法人・個人賛助会員	五八社
特別賛助会員	一七五人
名誉会員	七二人
計	二〇二社 一、九六九人

第六期(五十八・五十九年度)委員会

各委員会の委員長の委嘱により、左記のように第六期委員会(総務・会員資格・企画・会報)の構成が決定しました。(委員名・役職は六月委嘱時のものです)

総務委員会

委員長 渡辺 襄 毎日新聞社常務取締役主筆・電波担当

委員 加藤祥二 読売新聞社常務取締役調査研究本部長兼出版局長

藤村邦苗 サンケイ新聞社東京本社編集局長

酒井新二 共同通信社専務理事

若松信重 中日新聞社取締役渉外・電波担当

田中武志 日本放送協会副会長

東 守之 東京放送報道局長

江尻 進 日本新聞協会専務理事

泉 長人 日本民間放送連盟専務理事

理事長 新井 明 日本経済新聞社代表取締役副社長

大阪本社代表・電波担当

副理事長中江利忠 朝日新聞社取締役東京本社編集局長

長

常盤恭一 日本テレビ放送網常務取締役業務本部長

会員資格委員会

委員長 加藤祥二 読売新聞社常務取締役調査研究本部長兼出版局長

委員 細川洋一 朝日新聞社編集局次長

赤松大麓 毎日新聞社編集総務・論説委員長

滝沢国夫 読売新聞社新聞監査委員会委員長

吉田安伸 日本経済新聞社編集局次長

亀山 旭 共同通信社編集局次長

内藤正夫 日本放送協会報道局次長

山同 正 東京放送報道局政経部長

上野一彦 フジテレビジョン国際局長付(局長)

山田年栄 日本新聞協会事務局長
長竹成吾 日本民間放送連盟事務局長

企画委員会

委員長 藤村邦苗 サンケイ新聞社東京本社編集局長

委員 本島 宏 朝日新聞社編集局シンポジウム事務局長

伊藤光彦 毎日新聞社外信部長

森本良男 読売新聞社外報部長

一木 豊 日本経済新聞社編集局次長兼政治部長

友田 錫 サンケイ新聞社国際報道部長
広瀬一郎 中日新聞社東京本社論説主幹
平田真巳 共同通信社論説委員長
米 忠一 時事通信社編集局次長
藤岡 進 山陽新聞社東京支社編集部長
片岡礼次郎 四国新聞社東京支社次長兼編集部長

石丸和人 山形新聞社論説委員

高野 洋 日本放送協会解説委員室解説委員

水野 堯 東京放送報道局外信部長

藤川魏也 日本テレビ放送網報道局長

泉田 豊 フジテレビジョン報道局外信担当部長

武藤 懋 全国朝日放送報道局次長

鈴木幸夫 テレビ東京解説委員長兼チーフキヤスター

永町敏昭 日本新聞協会事務局次長兼編集部

長

河野昌之 日本民間放送連盟機関紙編集長

有馬真喜子 個人D会員

石山四郎 〃

中沢道明 〃

会報委員会

委員長 深谷憲一 テレビ東京取締役

委員 桂 敬一 日本新聞協会技術担当主管

井出新六 個人D会員

斎藤吉史 〃

安延久夫 〃

先月のクラブゲスト

村上泰亮 東京大学教授



レーガ
ン、サッチ
ャーの新保
守主義の評
価をめぐつ
ての経企庁

吉富勝氏との論争について。「吉富氏は現在の不況を循環的なものと認識しているが、私は構造的なものと見る」。これが一番の対立点。世紀単位の世界経済システムを終えんに際し、各国は自己中心主義的政策に傾斜が、「新保守主義の処方箋では世界経済は活力を回復し得ない」と持論を述べる。【八日(水) 研究会「同時不況下の日本経済」 司会 平田真巳企画委員 出席 六八人】

ソン・サン 民主カンボジア連合政府首相



国連決議に従っての解決が前提だが、「ベトナムの名誉ある撤退

を留意したい」。【九日(木) 記者会見 司会 小林淳宏理事 通訳 恒川邦夫 出席 七六人】

竹下 登 大蔵大臣



来年度の予算編成基本方針についての質問に、「根源に逆のほり、これは個人、これは企業、これは地方、

これは国と仕分けをやり直したい」として、生活保護費の地方負担率の引き上げ、教科書無償の見直しを示唆した。防衛費の扱いについての質問には、「人件費などの当然増がどのくらいになるかをみなければならぬが、GNP1%の枠内とすることで、他の施策を実施できたともいえるので、1%の歯止めは必要と思う」。【十四日(火) 記者会見 司会 鈴木幸夫企画委員 出席 九二人】

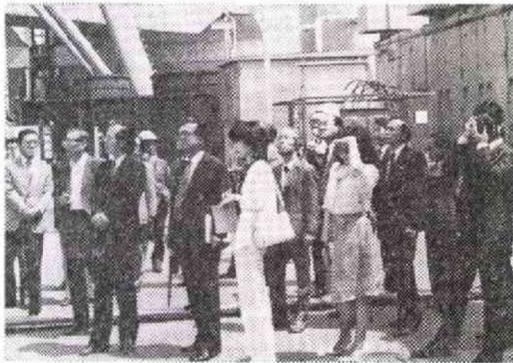
安倍晋太郎 外務大臣



中ソ、米中関係を注視している。前者は「入口で停滞している印象。対米けん制といった面も……。大きく

進展するとは思ってない」。後者は「米国の台湾政策やテニス選手の亡命でギクシヤクシヤしたが、これまで積み重ねた基本的

見学会



六日(月) 東京電力燃料電池発電実験プラント見学会 出席 四一人 説明 三井恒夫取締役技術開発研究所長



二十九日(水) 南極観測船「しらせ」見学会 出席 六四人、二十八日「しらせ」建造記録等南極関係フィルム映学会 出席 三一人

枠組を壊す意思があるとは思えない」。【二〇日(月) 昼食会 司会 一木豊企画委員 出席 一〇六人】

W・ピース 米国大使館経済担当公使



小長啓一 通産省産業政策局長
【二〇日(金) 司会 高野洋企画委員 通訳 横田謙 出席 五三人 二三日(木) 司会 鈴木幸夫企画委員 出席 八八人 いずれもティーン・バックク

ラウンダーで通商、産業政策問題をきく

M・サラール カイロ国立博物館館長

欧米に存在する出土品を回収するつもりはと問われ、個人的意見として「各国の博物館へ派遣されているエジプトの文化大使です。これは全人類の遺産」。

五千年前にビール

とワインを楽しんだ古代エジプト人の生活と信仰を語る。

【二八日(火) 記者会見 司会 牟田口義郎 出席 二三人】



とっておきの話

八方破れの労組委員長

高橋武彦

私にとって、最もすさまじい人生体験といえは、なんといっても戦争である。旧満州のハイラルからフィリピンに向かったのは、昭和十九年の秋だった。すでに敗戦の色がはつきりと見えていた。

私たちの輸送船は魚雷で撃沈された。私は、十八時間近く海に漂ったが、運よく助けられた。それからルソン島に向かった。着いたのは十九年の暮近くであった。年が明けて間もなく米軍のリンガエン湾上陸である。私たちの部隊は、その正面の砲兵隊だった。

ここで全滅に近い打撃を受けた。私も右足の踵（かかと）に機関銃弾を受けた。それから後退につぐ後退の負け戦で、終戦をルソン島北部の山中で迎えた。終戦直前に、小銃で腰部を撃

ちぬかれた。運のよいことに内臓におよばなかったので、命だけは助かった。

このような戦争体験は、私の同年輩の人たちは、ほとんど持っているだろう。ルソン島の山中で、敵弾と飢えの両方と戦いながら生きつづけた苦しみを思い出すと、「もうたくさんだ」と、心の底から叫びたくなる。

私といっしょにハイラルを出発し、フィリピンから帰ってきたものは、私の中間では、私を含めてたった二名だけである。

冒頭に、こんなことを書いたのは、戦後、毎日新聞政治部に復帰して以来今日まで、この戦争体験が、私の生き様に深

くつながつているような気がしてならないからである。

私は、自分自身が実に凡庸な人間であることをよく知っている。中学、高校、大学（いずれも旧制）の学生生活で、最もエネルギーを注ぎ込んだのは柔道であったろう。いわゆる勉強の方は、入学、進級、卒業に必要な最低限で済ました。

そんな凡庸な人間に、新聞記者（私たちの学生時代にはジャーナリストなど）やれたことは余り使われなかったような気がする）として、いい仕事ができるはずがない。

そこで、新聞記者として「とっておきの話」は、すぐれた記者の人にお願ひすることにした。私は、編集者からの依頼の本旨とはちがうかもしれないが、新聞社にいる間に体験した最も人間臭いことについて書くことにする。それは、毎日新聞社の労働組合委員長としての体験である。

私が委員長になったのは、約三十年前のことである。私は、当時の自由党クラ

ブから外務省クラブに移って間もないときである。次期委員長の選挙で意見が対立し、難航していた。そのとき、私の名前を出すものがいて、それまで名前の出ていた二名の候補をおろすことになった。そうなったところで、私に「こうなったのだから、引き受ける」という交渉であった。

大会の期日は迫っているし、私が「ノー」といえば、またふり出しに戻って混乱するということから、おかしな使命感から私が引き受けることになった。

私が委員長になることに最後の最後まで反対したのは妻であった。それには理由があった。ちょうどそのとき、結婚七年ぶりでもうが生まれて、まだ一年も経っていない。こどもは、よく発熱した。組合の大会は河口湖で開かれたが、折悪しく、そのときこどもが高熱を出した。私は会議がすむと東京へ引き返し、翌早朝、河口湖へ向かうという状態だった。

このときは、ほんとうに辛い思いをしたが、ここまできたら個人的事情は切り捨てねばならぬとハラをきめた。

それからは、労組の専従者で、書記局へ出勤することになった。そこには、前々から労組に関係しているベテ



たかはし たけひこ氏略歴 大正五年、大分県出身。東京大学法学部卒。昭和十六年毎日新聞入社。政治部勤務のあと、二十九年五月から二年間労働組合委員長を務める。三十一年政治部副部長、三十六年論説委員、論説副主幹を経て、四十六年主幹（役員待遇）、四十七年取締役。五十年二月常務取締役東京代表、同年七月常勤顧問に。五十一年二月役員となり、現在社友。五十一年四月から（社）国民政治研究会理事長を務める。六十六歳。

ランたちが顔を出し、議論するが、それを耳にする私は、全く場ちがいのところに座っているような気がした。私は、そこで「私なりの考えでやる以外にない」と思った。そのころ、各新聞社の労組は、新聞労連を通して総評に加盟したところであった。総評の事務局長は高野実氏であった。高野氏は、いつも詰め襟の服を着ており、いまの総評幹部とはちがって、まるで宗教者のような印象を与えた。高野氏は、静かなアジテーターであった。そして「ストによって企業がつぶれても、そこから革命の芽がのび出るのだ」という指導であった。

私は、どうしてもそういう気にはなれなかつた。当時は、労働運動イコール社会主義運動、したがって、労働運動の指導者は、当然社会主義者とならねばならぬ、というムードであった。私は、このムードに強い抵抗を感じた。



日本の労働組合の多くは企業内組合である。私を委員長につけた人たちの多くは、社会主義者ではない。そこで、社会主義運動とは無関係に、毎日労組の人たちの生活を守り、権利を高めることを考えることにした。そうハラがきまると、「そもそも労働組合とは……」など思い悩む必要を感じず、気がぐんと楽になった。労組員の賃金を上げ、福祉を充実するためには、企業にそれだけの能力が必要である。それには、企業の経営がよくならねば、どうにもならぬ。当面、銀行から借りてまかなっても、それは経営を悪化させるだけだ。そこで、労働組合にとって必要なのは、企業経営の勉強だと思った。株主総会に提出される貸借対照表や損益計算書、毎月、組合に示される月例報告などについても、細かく内容を検討しはじめた。大阪で中執を開いたとき、関西電力の太田垣会長を招いて経営の勉強

会を催した。いま考えると、よくもこんなことができたものだと思う。私は、いまの旭化成社長である宮崎輝氏を時々訪ねた。宮崎氏が若くして経営の中核にあり、中労委の委員もしていたので、経営と労働の両面で見識を持っている人として、意見をききに出かけたわけである。そのころの毎日新聞の経営の実情は、けつして順調ではなかつた。私は、将来のため、いまのうちに経営体質を改善しなければと考え、労組としてはなじまないが、あえて「社業振興」を労組の課題として提起した。



これを持ち出すのには、かなりの勇気が必要だった。当然の帰結として、当時の経営者の責任追及につながるからである。これを、箱根で開かれた中央委員会で、「高橋ひとりの責任で……」と持ち出したが、その波紋は予想以上に大きかった。政治部の先輩で局長という要職にあつた人から、「君は社長を退陣に追い込み、その後〇〇氏を迎えようとしているといううわさだが……」といわれて、びっくりした。こんなうわさをだれが出したかなど問題ではなく、そんなうわさが社内にあるとすれば、せつかくの「社業振興」の

運動も、人事をめぐる陰謀とみられるおそれがある。それは、労働組合史に汚点を残すと思ひ、経営責任の追及の手をゆるめざるを得なくなつた。

いま思うと、それが毎日新聞の歴史のなかで正しかったかどうかはわからない。私は、毎日新聞の取引銀行の最高首脳にも会つた。これは、社外のある先輩が紹介してくれることによつて実現した。これらの首脳は「君の考えは、むしろ経営者から直接ききたいことばだ。協力するからがんばれ」と激励してくれた。

私は委員長を二期つとめた。一期では仕事ができないし、三期では新聞記者という本業がダメになると考えたからである。経営者のなかには、私の責任追及に、理解と協力を惜しまなかつた人もいた。それらの人も、いまは故人となつた。約三十年前、私はまだ若かつた。毎日新聞の将来を考え情熱を燃やしたことも、いまや遠い思い出でしかない。この思い出のなかに、ほんとうの「とつておきの話」がある。しかし、いまはそれを書くわけにはいかない。

日本海中部地震

ワーキングプレス

五月二十六日午後零時三十分から、揺れは五分近く続いた。編集局内に資料類が散乱し、棚が倒れ、ガラスが飛び散る。そうした中で号外を出し終えたものの、それから長い闘いとなった。

死者八十二人、行方不明一人(六月二十七日現在)。そのうち七十八人までが海岸で津波に巻き込まれたものだ。捜索は難航した。陸上被害も、山崩れなど、その広がりや日を追ってあらわになった。さらにひっきりなしの余震。六月九日には、日中に震度3が二回、夜に入って震度4が二回。もうやめてくれ、と叫びたかったほどだ。

取材に当たる者自身が被害者でもあった。地震直後、チャーター機で真っ先に男鹿半島から能代港へと飛んだ写真部員の家では、倒れてきた棚に打たれて、奥さんが重傷を負っていた。前線基地となった能代、男鹿両支局では水道、ガスが止まり、支局長の

奥さんたちはプロパンガスのコンロや近所の井戸からのもらい水で、本社からの応援部隊の世話に懸命だった。支局でも本社でも、全壊したり傾いたりした自宅を何日も放ったらかしのまま、取材に走り回る者もいた。

地震からはだれも逃げ出せない、だれしもがなんらかの影響を受ける、地震災害はみんなにかかわるものなのだ、ということをも、改めて思

みんなの結集

藤川 浄之

(秋田魁新報社 社会部長)

い知らされたことだ。そして、その「みんな」がますます深い意味を帯びてくる。

被害を総括してある大学教授が「私たちみんなの責任でもあるのですよ」とつぶやいたものだ。地震直後に急襲した津波や、砂地盤が震動で流動化し陥没する液状化現象などへの防備が皆無に等しかったことへの反省である。

確かに、海岸部の住民にさえ、日

本海には津波は無い、などの思い込みがあった。だから、男鹿半島では、家から飛び出していた住民の目の前で、遠足にきた小学生が昼食をとろうと浜に駆け出して行き、津波にのみ込まれたのだった。だれも危険を想像すらできなかったのである。

秋田県も、過去に何度も大地震の洗礼を受けている。経験域内のものである、昭和十四年五月一日の男鹿地震が記憶に生々しい。マグニチ

ュード7・0の直下型。死者二十八人、いずれも倒壊した家屋の下敷きになったり、山崩れに埋まったり、陸上でのもの

だった。この激烈な体験から「地震の時は浜に逃げろ」との言い伝えが独走し、津波への警戒心など吹き飛んでしまったのだろうか。

古文書を見ると、秋田県にも津波が押し寄せた記録はある。三十九年の新潟地震でも、潮位が一メートル以上上がった、と記録されている。あるいは「大地が裂け、どす黒い水柱が噴き上がった」などと、液状化現象そのものの記述も無数にある。これら



津波に襲われた秋田県八森漁港 (5月26日午後3時)

べての証言を総合しながら、絶えず防災対策に修正を重ねなければならなかったはずなのだ。こうした時間の軸にも沿って、過去から現在に至るみんなの証言を踏まえ、学問のあらゆる分野、行政、地域住民などすべての英知を結集して、生命を守るための総合作業確立を見直さなければならぬ。

秋田魁新報社が呼びかけた義援金募集には県内外、外国からまで、一億五千万円を超す励ましが寄せられた。この感動的な励まし合いのすがたも、後世にはつきりと伝えていかなければならない、と思っている。

サッチャー政権と報道

ワーキングプレス

英保守党が六月九日の総選挙で圧勝、サッチャー女史が二期目、向こう五年間の政権担当を掌中にした。自由主義陣営の主流を自負するサッチャー首相は、いまレーガン(米)、コール(西独)、中曽根(日本)各政権が登場してきた背景には、国境を超えて新保守主義を待望する状況があり、その先頭をきった自分の政治哲学、経済理論の正しさが立証された、と信じている。

「サッチャー主義」と呼ばれる英首相の信念は、単に日々の報道の対象として重要なだけではない。政府と新聞・テレビとの関係、官僚と政治家の役割、ひいては国民の動向とマスコミといった本質的な問題を提起している。一九八〇年から三年間、ロンドンを本拠とする特派員生活を過ごした私の個人的体験から整理すると、その問題点は、大方の想像以上とわいていい。

第一に英国のメディアはすべて経済的困難に直面してい

る。現在、ロンドンで発行されている全国紙は日刊だけで八紙あるが、「サッチャー支持」を明確に打ち出した大衆紙(例えば「サン」)の伸びが著しい。テレビも、欧州のトップをきつて始めた早朝番組の放送で、早くも民放「TV11AM」が視聴率不振で、保守党下院議員が再建に乗り込む事態が起こっている。

また、サッチャー首相は、米国の補佐官システムに似た機構改革を行

新制度、新方式の導入

浅井泰範
(朝日新聞社 外報部長)

った。外交、経済、世論対策の各分野に首相直轄の顧問を置いた。「新聞記者に質問されて、すぐ答えられないほど腹が立つことはない」ともらす英首相は、既存の官僚制度で汲み上げられなかった国民の動きを積極的につかみ始めた。

さらに「ビクトリア時代の価値観の復活を」と叫ぶように、勤勉、克己の精神を強調する。忍耐を説き、秩序を求める。不勉強なジャーナリ

スト、政治家、官僚、みな失格の烙印を押される。

こうした底流が速度を増すなかで、ロンドンの日本人特派員たちはがんばっている。現在、新聞八社、通信二社、テレビ五社、総勢三十二人。このほかにテレビ五社から英BBC日本語放送に出ている八人がいる。

日本のメディアの特派員たちは、「ロンドン外国特派員協会」に加入している。国別では有力グループで、最近

はアジア各国特派員の支援を得て、執行部に代表を送り込んだ。

だが、米国と違って、英国では、政府でも、民間でも、記者会見の頻度は少ない。英国人は、生来饒舌ではない。気候も不順である。食事も美味つづきとは参らない。いきおい内面的な強靱さが必要になる。

世界の情報交流の速度が急激に増すいま、「サッチャー主義」が生み出す波紋は、ひとり欧州にとどまらない。すでに、サッチ

ャー政権は、大手広告会社「サATCH・アンド・サアチ」にPR活動を依頼したし、今回の選挙戦では、ベテラン・ジャーナリストを広報担当参謀に引き抜いて、「一般のマスコミを超えた次元で、的確に国民の心理をつかんでほしい」と指示した。米国式に映ろうが、サッチャー首相は、日本も含めて、時代の先端をゆく制度や方式をひそかに英国に導入し始めたのである。

当然のことだが、特派員はますます勉強を要請せよし、何より日本人としての明確な視点を備えなくてはならない。



英首相官邸での日本人特派員との会見(昨年9月14日)

●講演記録●

ノーベル生誕

百五十周年

ステイグ・ラメル

(ノーベル財団理事長)

私がノーベル財団の理事長としてやらなくてはならない仕事というのは、世界の各地を回り、ノーベル賞の授与システム、つまりノーベル賞の候補者を決定して、その賞を与えるシステムがどのような機構を持ったものであるかを説明し、同時に、これに関して何か誤解があるなら、それを払拭していくわけです。ノーベル財団は、賞の授与の意思決定に関してはまったく参加しません。物理学、化学および経済学の賞を決定するのは、スウェーデンの王立科学アカデミーです。医学賞を決定するのは、カロリンスカ医学研究所です。文学賞はスウェーデン学士院が決めます。平和賞はノルウェーのノーベル委員会が決定します。これらはすべてノーベル財団と緊密な関係を持っているわけですが、それぞれの決定には、ノーベル財団は関与いたしません。

ですから、もし来年日本の方にノーベル賞が与えられることになったとしても、それは決して私の責任でもなければ、あるいは私が今回日本に来ることが出来たからでもありません。

独立した民間組織

ノーベル財団は、完全な民間組織です。私どもの責任の一つは、このノーベル財団が今後とも、政府とかあるいは外部のあらゆる力から、完全に独立したものであるとして存在し続けるということ、確保することです。これは国に関しても、あるいは個人の場合でも、それからまた財団のような一つの機関に関しても言えることですが、それが完全に独立をしていくためには、それ自身が非常に強い経済的な基盤を持つていなければいけない。現在の時点でノーベル財団の基金は一、八五五万ドルです。円に換算しますと、約三七億円くらいに相当すると思います。賞を六つ与えるわけですが、賞金はそれぞれ四、五〇〇万円くらいに相当するわけです。

かつてノーベル経済学賞を受けた、ミルトン・フリードマン氏が私に、いったいノーベル財団ではどのくらいのお金を持っているのか、ということをお聞きしたことがあります。その当時、私もノーベル財団には、現在よりも少ない基金しかありませんでしたので、そのように申しますと、フリードマン氏は非常にびっくりして、たったそれくらいのお金しかないのに、どうしてこんなに世界中に知られているのか、と申しました。彼が言いますには、アメリカには、ロックフェラー財団であるとかフォード財団があつて、それらは何十億ドルという基金を持っているということ、しかしながら、こうした財団が何をしていくかに関しても、ほとんどの人びとは知らないということでした。そこで私は、フリードマン氏に言ったのですけれど

も、ノーベル財団はダイナマイトを発明した人物によって創設されたものであるから、ほかのものよりも、それだけの爆発力があつてもしかるべきではないかと。(笑い)

財団は、各ノーベル賞授与機関の活動を調整するという仕事もしていますし、また、毎年十二月にストックホルムとオスロでノーベル・フェスティバルを主催します。

科学分野の基礎研究に

アルフレッド・ノーベル自身も発明家であつて、ダイナマイトを発明したわけですが、同時に彼は非常に成功をおさめた科学者でもありました。ノーベルが死去したときに、彼が持っていた特許の数は三百にもぼつていたということ、科学者としては珍しいことですが、ノーベルは非常に成功をおさめた企業家でもあつたわけです。彼は事実その時代の最も豊かな金持ちの一人でもありました。そのたくさんのお金を彼は、自分の研究所で行う基礎研究のために使ったわけです。彼は、物理学、化学、および医学の分野で研究を深めました。それで彼は、ノーベル賞をこの三つの分野においてつくったわけです。このような純粋な科学の分野で基礎研究を行う人たちが、もっと資金を必要としているであろう、と思つたからであります。

また彼は文学にも非常に関心を持っていました。自身、詩や小説を残しています。彼は、彼の時代の平和主義運動のリーダーの一人でもありました。彼は、一九世紀末のいろいろな平和関係の組織にも資金を与えています。それでノーベル平和賞というものが存在し

ているわけです。

“遺言状”への異論

ノーベルは一八九六年に亡くなりました。彼の遺言状があきらかになったとき、そこに五つの賞を創設するということが書かれていたということで、世界は非常に驚いたわけです。当初は、彼の遺言状はスキャンダルの種であったとさえ言われています。ノーベルの家族も非常に激怒しました。またスウェーデン国王も、初めは外国人に対して国際的な賞を与えるということは、愛国的でないと考えました。授与機関として遺言状によって定められている王立科学アカデミーも、その遺言状を見るまでは、それについて自分たちの意見をきかれたこともなかったということで、このアイデアに反対しました。

また当時の社会主義運動のリーダーたちは、このような考え方は、非常に資本主義的な考え方である、ということと異議を唱えました。そういうことで、当初ノーベル賞というものの考え方に、ほとんどの人びとが異議を唱えたわけです。

それで三年にわたり、法廷での訴訟等がくり広げられたわけです。そして一九〇〇年になり、やっとノーベル財団が設立されて、一九〇一年に最初の賞が授与されたわけです。

ノーベルの各賞は、非常な成功をおさめました。ノーベルの家族も大いに喜ぶ結果になりましたし、国王も喜びました。国王自身が毎年ストックホルムにおける授与式に喜んで出席して、賞を授与しているわけです。

受賞者の国籍問わす

なぜこれほどノーベル賞は成功したのでしょうか。簡単に四点指摘したいと思います。

まず第一点は、初めの段階からかなり多額の基金があったということです。第一回目の賞の賞金額は、一五万スウェーデン・フランでした。これは当時の大学教授の年収の二五倍くらいに相当しました。これほどの賞金をもらえるわけですから、たとえストックホルムが遠く離れたところであっても、そこへ行ってもらうだけだけの価値ある儀式であったというわけです。しかし、今日では賞金自体はそれほど重要ではなくなっています。

次の話をすれば、その意味がよく分かると思います。現在では、金の鍵を与えられまして、この金の鍵の金の金というのも大事ではありますが、より重要なことは、この鍵が何を可能にするかという、その機能にあります。この鍵を授与された人は、その国の政府なり民間の財団などの宝の箱というか、宝庫を開けることが出来ると思われたいわけです。それこそが重要なことではないかと思えます。ですから、今日、ノーベル賞の第一の価値は、その人に与えられる特権であるというふうに言えます。新たにノーベル賞の受賞者に決まった人は、一九〇一年にラントキンで始まった受賞者に与えられた特権が、そのまま自分に引き継がれていく、ということ信じることが出来るわけです。

このノーベル賞の特権に関して、それがずっと維持されてきた理由の第二は、この賞が国際的な性格を持

っているということです。一九〇一年当時も、世界各地でたくさん賞が与えられていたわけですが、本当の意味で国際的だったのはノーベル賞だけでした。たとえば、フランスのフレンチ・アカデミーはフランス人のみに賞を授与していました。英国の有名な賞も英国人のみを受賞対象にしています。ノーベル賞は当初から、受賞者の国籍をまったく考慮に入れることなくに賞を贈っています。

科学の重要性表わすシンボル

第三番目の理由を申しあげます。先ほどあげましたアカデミーのような授与機関は当初、そういう責任をまかされることに異議を唱えたわけですが、しかしながらいったんその仕事を引き受けたと決めますと、本気で誠実にその仕事を推進したわけです。最適格の受賞者を選ぼうとする活動に、全力を投入してきたわけです。受賞者を決定するプロセスには、実に二百人以上の人びとがかかわっています。

ノーベル委員会は、毎年、世界中の専門家に対して何千通もの手紙を出すわけです。五つの分野で最も適格な候補者を指名してほしい旨、通達します。手紙を出すのが十月でして、十二月一日までに候補者の氏名がストックホルム、あるいはオスロに届かなくてはならないわけです。毎年、各委員会は百人以上の候補者の氏名を受け取っております。そして、それぞれの候補者に対しては、その分野の専門家たちが非常に厳密な形で審査をいたします。それに対しての報告書も書きます。候補者として指名された人びとが、いったいどのような研究をしてきたのかということ、ある

いはどのような背景を持っているのかということに関して、非常に綿密な調査をします。このような慎重な調査を行うのは、それぞれの分野の専門家です。そのためノーベル財団が出費する金額は、実際にノーベル賞に提供する金額と同程度になるわけです。

今日の問題は、世界中にはあまりにも優れた科学者が多過ぎて、賞の数が十分ではないということです。ですから、こういうふうに申しあげるときには、必ずしも、世界には、本来ならばノーベル賞を受けるべき科学者が多くいるけれども、実際に与えることが出来る賞の数が限られているので、全員に与えることが出来ない、と。

結局、私どもが出来ることは、その優秀な科学者の中の何人かの方にのみ授与することです。そういう点から考えるなら、ノーベル賞というのは、純粋な科学の重要性を表わすシンボルであると考えざるべきものでありましょう。

私どもが候補者がどうも不足しているようだと考える賞は、平和賞です。その理由は、みなさま方もよくご存じだと思います。

小さな中立国ゆえの成功

そして、このノーベル賞が当初からいまままで特権を保つことが出来てきた最後の理由は、授与機関が小さな国にあるということだと思います。スウェーデンもノルウェーも、大国の闘争の枠からはずれた非常に小さな中立的な国です。そういうことから、世界の人のびとが、これは独立志向型の機構であり、外部からの政治的な圧力に屈することがないのだ、ということを感じて

じてくださるわけです。

もしノーベルが、この賞を大国の機関に与えていたなら、決して二度の世界大戦を生きのびられなかったでしょう。スウェーデンは一八一四年からまったたく戦争にかかわってきませんでした。このことは、このような種類の賞に關しましては、非常によいことであると言えると思います。

最後に申しあげたいのは次の点です。ノーベル賞は、いまや科学、文学および平和の探求という意味での優秀さ、卓越さを示すためのシンボルであるということです。この賞は個人に対して与えられるものです。ノーベル自身がそのように望んだからです。しかしながら、もしそうではなくて国に対して与えることが可能であったなら、日本はその候補の国になると私は思います。なぜかと申しますと、この日本には、ノーベルが志したと同じ優秀さを求め続けようとする努力が見られるからです。

質疑応答

稲田（個人）ノーベル賞の仕組みについて懇切な説明をいただきありがとうございます。ところで、いまのお話の中にノーベル経済学賞のケースが除かれていたように思いますが、いかがな仕組みになっているのか。

ラメル この経済学賞は百パーセント、ノーベル賞であるというふうに考えることが出来ない賞です。これは一九六八年にスウェーデンの中央銀行の寄付金によりまして、アルフレッド・ノーベルを記念するために設立された賞です。きょう私がみなさま方に対して

申しあげましたお話は、アルフレッド・ノーベルと彼の生誕百五十周年ということのみに焦点を当てたものです。

ノーベル経済学賞の正式な名称は、アルフレッド・ノーベルを記念してスウェーデン中央銀行が与える経済学における賞、というものです。この扱いは他のノーベル賞と何ら変わりないわけです。すなわち、スウェーデン王立科学アカデミーがかかわっているものです。二月十日に他の賞とともに授与されるものです。スウェーデン王立科学アカデミーの経済学賞委員会から、世界中のエコノミストに対して、資格のある候補者を指名してほしいという手紙が出され、選考されます。

堤（日経）ノーベル賞が始まってから八十数年のあいだに、科学が進歩したこともあって、当時のように、物理学、化学、生物学というふうに明確に分けることが大変困難になってきた。事実、受賞者もかなり入り乱れている。そろそろ再検討が必要なのではないだろうか。また自然科学だけに限られているが、心理学とか人文科学をそろそろ含めるべきではないだろうか。

ラメル ノーベル委員会あるいは授与機関が、物理学、化学、医学というものを非常に狭く解釈していたならば、これは間違いであったと申しあげなければなりません。実際には、そのようにはしてきていないわけですから、一九〇〇年以来、非常に多くのことが起こってまいりましたので、ノーベル委員会といたしましては、このルールを非常にリベラルな形で解釈し始めているわけです。具体的に申しますと、たとえば物理学の分野で与えられるべき賞が、天文学者にも与えられ

たわけです。医学に関しても、コンラード・ロレンツのような病院論をやっている人にも与えられています。また心理学の分野の人にも与えられる可能性は十分あると考えております。たとえばフロイトがいまも生きていたなら、候補者になり得るのではないかと思えます。

化学で、現在、最も興味深いことが起こっているのは、生化学の分野です。そういうことから、この生化学の分野の方がたにも、すでに多くの賞を与えてきております。

また、経済学の分野でありますけれども、本来ならば社会学者と呼ぶべき方がたにも、経済学賞が与えられていると思えます。

そういうことから考えまして、特に二十年前、あるいは三十年前と比べますと、現在の規則の解釈はずっと前向きな形でなされていると思えます。したがっ



▼六月二十九日、ジョン・グラハム氏が帰国しました。オーストラリア政府の広報局次長に就任します。クラブの会員のみなさまには滞日中いろいろお世話になり、よろしく伝えてほしいとの伝言でした。後任はヒースコック参事官です。

豪州大使館 武吉吉朗会員

▼豪州国立大学(ANU)とサイマル・アカデミーの第一回共同企画「英語研修・オーストラリア研究セミナー」へ、七月二十三日から二週間、二十人の学生、社会人をつれて参加します。村松増美会員

て、自然科学の約九五%はこの賞です。すでにカバーされている、と申しあげてよいのではないのでしょうか。

村野(個人) 一九六五年に朝永さんが物理学賞を受けられたあと、六六年五月に行われた記念講演のとき、NHKの特派員として私はストックホルムにまわりました。録音をとらせてほしいということをお願いしましたら、ノーベル賞の記念講演というのは録音やフィルムをとったりすることはしないようになってい、というお話だったので。しかし私は、特別に小さなテープレコーダーでとらせていただき、そのことによって、朝永先生が亡くなったときにそのテープを記念として、ご遺族に差しあげることが出来たわけです。私は、あの記念講演はむしろテレビを通して世界中の人たちに放送したほうがいいのではないかという感じを持っています。

ストックホルムへうかがったときに感じたのですが、毎年ノーベル・フェスティバルで世界中の非常に優れた科学者がストックホルムに集まるということ、は、スウェーデンの若者たちに大変いい影響を与えているなあ、という印象を持ちました。スウェーデンの若者たちが世界中の科学者の話を聴けるといふ非常に素晴らしいチャンスを与えられている。青年たちが世界中の科学者に対して、自由にいろんなジョークを発して話し合えるというのは、非常にうらやましい雰囲気だと思えました。いまやサテライトもあることですから、これをぜひ世界中に、テレビなり新聞を通して知らせていただきたいという希望です。

ラメル 私ども、ルールの解釈を、以前よりも自由に幅を広げてやっておりますので、いまやノーベル記念講演であれ、あるいはノーベル・フェスティバルで

あれ、自由に報道関係の方がたに取材していただいているわけです。昨年をふり返ってみても、非常に多くのジャーナリストの方がたがストックホルムにいらしてくださいました。約六〇人くらいがラジオ、テレビ関係の方がたでした。

ご指摘のようにノーベル賞の大きな利点の一つですが、科学というものの重要性に対して、普通の人びとあるいは若い人びとの注意を喚起できるという点があります。ですから、スウェーデンには「ムーブメント・イン・ヤング・サイエンティスト」という運動があります。その活動の一つを紹介しますと、毎年、世界中から三〇人の若い科学者の方がたをスウェーデンに招いて、このノーベル・フェスティバルに参加していただいています。若い科学者の方がたが受賞者と会うことが出来ますし、自分たちで科学関係の会議を持つことも出来ます。

きょうこの機会を利用してみなさま方に提案をさせていただきます。と思いますけれども、ぜひ日本の若い科学者の方がたもストックホルムに来て、この儀式とノーベル・フェスティバルに参加をしていただきたいと思います。

日本に若い科学者を育てようとする組織があるのかどうか、私は存じませんが、もしあるならばぜひその方がたにお伝えいただきたいと思えます。最も優れた能力のある若い科学者を選んでいただきたいと思います。私のほうに連絡していただければ、私のほうから招待状を差しあげたいと思えます。年齢に制限がありまして、十六歳から十七歳くらいの方という条件がついております。つまり高校生くらいの方ということです。

大分合同新聞

東京支社訪問

二期目を迎えた平松守彦大分県政。通産官僚出身で、初代の電子政策課長という経歴の平松氏が県知事就任以後、大分は大きく変貌した。五十五年からの二年間に、約三十社の先端技術企業の誘致に成功、また「一村一品運動」「ムラおこし運動」などユニークな地域振興で、県全体が活性化している。

「県政が活気を呈すると、それが全てに波及します。陳情団の数もグリーンと増え、東京での取材も、ほんとに忙しくなりました」

と、取締役・東京支社長の江藤嘉美会員。

支社編集部は、現在、阿南幸一記者(36歳)と今戸葉二記者(27歳)の若手二人。参院選の真最中の六月二十日の訪問、阿南記者は選挙報道の応援で本社へ飛んでいた。

「選挙の時は、必ず一人本社へ戻します。国会議員がみんな選挙区へ帰っているわけですからね」

東京の記者のほうが地元国会議員との接触が多いので、顔のつながりで、取材に便利とい

うようなこともあるようだ。本社へ応援に行った阿南記者は朝刊一面の「参院選 最前線を行く」の連載チームに参加していた。

東京に残っている秘書からの情報集めが意外と大事という今戸さん。留守番組を訪ね、耳にした情報を本社へ伝える。「秘書の方からかえって意外なことを聞き出せたりするので、議員会館での雑談もバカにできないんですよ」

江藤支社長は四つに分けて東京での取材活動を説明した。一つは中央の動きを県政との関わりで伝える。二つ目は上京する役所の幹部、陳情団のカバー。三つ目が県産品の販路拡張状況の報道と応援。四つ目は、在京県人の活動を伝えること。「どこも同じだろうけど、これが地方紙の役目であり、地域に密着した紙面づくりをめざす我々の任務です」。

支社から送る定期ものは五十六年五月にスタートした「東京レポート」(土曜日朝刊)で、すでに百回を超えている。在京県人の紹介や催し物の案内もする。

先端産業誘致で
支社活動もフル回転

また、美術・展覧会の紹介欄「東京画信」を月に二、三回送る。

「最近、東京で個展をやる人が増えてるね。春、秋のシーズンには全部を追いかけると大変ですよ」と江藤さん。これらの記事には、写真がふんだんに使われる。

「記事だけでは実感が出ないですからね。作品の写真や、会場の写真を必ず添えるようにしています」

学生時代からの「写真狂」を認じる今戸記者の腕の見せどころのようだ。二人の記者の分担は、今戸記者がスポーツも含めた軟派もの、阿南記者は政治、経済を主に担当している。

ところで、大分合同新聞は、完全な朝・夕刊セット販売をとっており、統合版がない。夕刊も全て宅配する。

「夕刊の発行部数がグッと減る地方紙が多いけど、ウチは、朝刊二十万部、夕刊二十万部なんです。だから、一日四十万部刷っていることになるんですよ」

江藤さんの名刺には「創刊明治十九年朝刊20万部・夕刊20万部」と刷り込まれている。

「広告などの営業活動の時は、これが効果てき面。企業誘致との関連で、営

業面での東京の役割も大きくなりましたからね」

朝刊掲載の広告は中央の企業が主で、地元流通関係の広告は、夕刊に掲載されることが多いという。

さて、「シリコン・アイランド」のいわばメッカを目ざす大分では、すでに稼働している東芝、TDK、キャノンの工場に加え、ソニーが六十年に操業を始める予定だ。また、外資系会社の工場設置も二社決まっている。

「大分」活況の中で、大分合同新聞は昨年八月創刊三万号を発行し、三年後には百周年を迎える。

(長谷川)



銀座8丁目・トミタビル4階の支社フロア。(中央が江藤支社長)

紹介 会合

3日▽同友会・労務研究会(協会 畔上和也会員) 4日▽座談会 樋口陽一東大教授、岡野加穂留明大教授、綿貫諒治上智大教授(河北沼田潔会員) 7日▽日豪経済シンポジウム 小林宏治日本電気会長、稲山嘉寛経団連会長、大倉真隆日本輸出入銀行総裁他(日経 立川芳峰会員)▽同盟経済会―同盟通信の経済部OB会(共同 吾郷慶一会員) 8日▽ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団記者会見(中日 夏目十郎会員) 9日▽ヒロシマ・グラフィック・アピール・ポスター発表会(中国放 秋信利彦会員)▽北日本政経懇話会(北日本新堀田良一会員)▽政治部OB会(朝日 川島正英会員)▽悠々会 ゲスト・松岡英夫氏(読売 森岸生会員)▽婦人家庭部懇親会(日経 早川克己会員) 13日▽オールスター抽選会議(写真記者協会 石渡和夫会員)▽第一回世界陸上選手権大会説明会(大広進藤次郎会員) 15日▽中央調査社総会(時事 佐藤信雄会員)▽青森県ジャーナリストの会(東奥日報 和田



鬼塚宇宙飛行士一家(6月21日)

満郎会員) 16日▽対談・福田幸弘国税庁長官と吉永小百合(日経 梶田進会員)▽論説委員OB会(朝日 川島正英会員)▽寄稿者懇談会(ジャパタイ 羽仁艦会員) 17日▽東京愛媛クラブ例会(愛媛新 堀定省会員)▽放送文化懇談会 茅誠司氏、松本重治氏他(放送文化基金 青野雅哉会員)▽講演会 ゲスト・江藤淳氏(アール・エフ・ラジオ日本 南丘喜八郎会員) 21日▽エリソン・S・鬼塚NASA宇宙飛行士記者会見(米大使館 鈴木茂男会員) 22日▽第54回定例会員総会(協会 宮地進吾会員) 23日▽経済通信局届送迎会(共同 西崎哲郎会員)▽インタビュー 作家・森村誠一氏(朝日 広橋敏栄会員) 28日▽ジョン・ブルトン・アイルランド産業相夕食会(朝日 小笠原竜三会員)

囲碁の会

一宮女流棋士を迎える

六月二十五日(土)は本年度第一回の大会を開催するとともに、久しぶりで女流プロ棋士を迎えて指導対局をお願いした。参加者は総勢二十一人。

大会は、A、B、C三クラスに分け、勝ち抜き戦により順位を争った。

参加者の少なかったCクラスは下村澄三級(毎日放送)が早々に優勝を決めた。二位は後藤光祥三級(ILO)。

Bクラスは、宮沢昭二郎三段(日本海事)と馬淵良俊初段(サンケイ)が決勝を争い、宮沢三段の勝ち。

Aクラスは、本島宏四段(朝日)と出田裕五段(東京)が午後七時すぎまで最後の熱戦を展開、本島四段の優勝となった。一回戦で菊地俊朗四段(信毎)と三時間半にわたる死闘をくりひろげた出田五段は、決勝までほとんど休みなしの六時間余を戦い抜いたことになる。

当初は三者で総合優勝を争う予定にしていたが、予想される終局が午後十時を超えることに恐れをなした世話人の独断で、急ぎよ中止ということになった。

一方、指導対局にお招きしたのは二宮英子初段。日曜昼のNHKテレビ囲碁トーナメントの記録係で全国的に顔なじみの、若くて可愛い女流棋士。父上の意思



神秘的な顔、顔。当意即妙のジョークもこの日は出が悪かった——二宮女流棋士初段の指導対局。同好会会長新井四段(右)と創設以来の幹事役堀川五段(左)

で小学校六年の時、院生(プロの卵)になった二宮さんは、強い初段で将来の成長株と評判の女流プロ。碁の力は容姿とは全く関係なく、アマチュアにとつてはまことに敵しい先生であった。

囲碁同好会えりぬきの五段から二段までの猛者四人が、それぞれ三子から六子のハンデをもらって二面打ちに挑戦したが、プロの壁は厚く、善戦空しく(と思わされて?)枕を並べて討ち死——で幕となった。

次回は七月二十三日(土)午後一時からの予定。多数参加を!

プロフィール

第102回企画委員会

昭和58年6月13日(月)
日本記者クラブ大会議室

シリーズ研究会のテーマについて検討した結果、**ソ連**、**軍事技術**、**税制**などをとりあげることとした。ソ連研究は**森本**、**伊藤**、**水野**の三委員、軍事技術は**本島**、**高野**、**武藤**、**石山**の四委員、税制研究は**広瀬**、**石丸**、**有馬**の三委員が中心になり実施することにした。また、硬派ものの企画のほか軟派ものについても積極的に取り組むことにした。

出席 藤村委員長。本島、伊藤、森本、一木、友田、広瀬、平田、米、藤岡、片岡、石丸、水野、藤川、泉田、武藤、鈴木、河野、有馬、石山の各委員。

第42回会報委員会

昭和58年6月15日(水)
日本記者クラブ応接会議室

六月号について意見交換の後、七月号の編集方針について協議した。

「とっておきの話」は高橋武彦氏に執筆依頼し、『ワーキングプレス』には日本海中部地震と英国総選挙をとりあげることにし、『東京支社訪問』は大分合同新聞に決めた。

出席 深谷委員長。桂、井出、斎藤、安延の各委員。

第71回会員資格委員会

昭和58年6月16日(木)
日本記者クラブ小会議室

七月一日付の入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 加藤委員長。細川、赤松、滝沢、亀山、内藤、山岡、上野、山田、長竹の各委員。

第25回総務委員会

昭和58年6月27日(月)
日本記者クラブ小会議室

出席 渡辺委員長。酒井、若松、田中、江尻、泉の各委員。新井理事長、中江副理事長。

第64回理事会

昭和58年6月27日(月)
日本記者クラブ大会議室

施設運営委員会の新設を決定し、委員長に小林淳宏理事(時事)を選任し、委員会の構成については委員長に一任することにした。笠置事務局長の任期を昭和五十九年五月の通常総会までとすることを決めた。

出席 新井理事長。中江副理事長。渡辺(襄)、小林、若松、田中(義)、岡本、南里、田中(武)、渡辺(修)、吉岡、深谷(憲)、吉田、成田、江尻、泉、前田の各理事。深谷(勝)監事。

「より役に立つ」会報に

— 会員からの提案を歓迎 —

会報委員長 深谷憲一
(テレビ東京 常務取締役)

今期の会報委員長を担当することになりました。前任者小林淳宏さんはじめ会報委員各氏および事務局の方々のご努力によって、会報は逐次形が整ってきていますので、これまでの紙面の長所をできるだけ踏襲するとともに、会員にとってより役に立つ会報をめざして努力していくつもりです。

幸い桂敬一、井出新六、斎藤吉史、安延久夫各委員とも熱意をもってご協力いただけることになっております。

いま当クラブ会員数は二百余社、二千名になんなんとしておりますが、記者会見に出席できる人数は五十七年度の例でいうと最も多かったのがサッチャー英首相の四〇〇名、ついでミッテラン・フランス大統領の三三二名、中曽根総理、シムルツ米國務長官の各二五八名で、昼食会も含めた参加者数の平均は一回九八名

程度、つまり出席者は全会員の五割にすぎません。ということは会員の九五%が会報によってのみ日本記者クラブの動きを把握できるということですから、こうしてみますと、会報の使命はまことに重要であります。

日本記者クラブの会報の果たすべき役割は、大きくいって三つあると思います。一つはクラブの運営上理事会等で決めた重要事項で、クラブの動向を示すものを報告、報道すること。一つはクラブ行事の内容を紹介することによって、出席できなかった会員にサーブスすること。もう一つは会員相互の懇親友好を深め啓発参考になるものもろの企画記事の掲載で、この三つのどの項目も欠かしてはならないと考えています。そして親しめる会報として面白さが出せれば更に色彩を加えることができそうです。

どうしたら役に立つ会報が作れるか、各月一回会報委を開いてチエをしぼる予定ですが、会員の皆さまからもどしどしご提案いただければありがたいと思っております。どうぞよろしく。



桂 敬一
(日本新聞協会技術担当主管)

なお事務局予備軍として手伝いを命じられている、といったところでしょうか。企画にはいいネタもなく、知恵もあり浮かびませんが、業界団体に棲むことと久しく、全国の新聞・放送会員社の消息なら少々わかるので、会報寄稿者の顔ぶれを多彩にするうえでいささかでもお役に立てればと思っております。



井出新六
(個人D会員)

日本記者クラブはわが国の「言論の自由」の総本山だと思ふ。そこで出す会報は、まさに「言論の自由」そのものということになる。会員相互の親睦やコミュニケーションの場でもあるが「自由」のスジはキチンと一本通さねばなるまい。

幸い前委員や事務局諸兄姉の努力で、いい形が出来ている。私は吹けばとぶよなシンマイ委員ながら体裁だけではない機能を果たしたいものと思ふ。



斎藤吉史
(個人D会員)

今日ほど世界に、そしてジャーナリズムに、大きな変動の起こっている時代は、余り

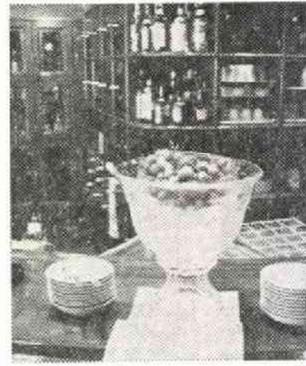


安延久夫
(個人D会員)

会報には性格がいろいろあるので一概にこうあるべきだとするのは難しい。親睦、会員同志の音信、あるいはタメになる記事、つまりインフォーマティブなものに重点をおくか否かで編集方針も変わる。この中で種々の要素をバランスよく掲載することを目指して、精一杯努力したいと思ふ。たまには一口漫画や風景画や写真などを使うのも一計かと思ふますが、いかがでしょうか。

山形新聞社から

「さくらんぼ」の便り



山形新聞社の服部敬雄社長からクラブへ、見事な桜桃がドッサリ届けられました。大粒のキリッとした色つやの初夏の味

覚、早速、クラブラウンジで会員の皆さんに提供させていただきます。

本場直送の特選品を口に含み、会員の方がたも一時少年時代へのノスタルジア。

目次

施設運営委を設置	1
第六期委員会名簿	2
『先月のクラブゲスト』	3
『とっておきの話』	4
『ワーキングプレス』	6
日本海中部地震	6
サッチャー政権と報道	7
講演記録『ノーベル生誕百五十周年』	8
ステッグ・ラメル ノーベル財団理事長	8
『東京支社訪問』	12
大分合同新聞	12
会合紹介／囲碁の会	13
プロフィール／会議報告	14
役に立つ会報を作ります	15
事務局から	16

夏のレストラン土曜の夜は休みます

例年どおり七月、八月の土曜の夜のレストランを休業させていただきます。

左記の七日間に限って夜はラウンジのスナックテーブルで、お食事をしていただくこととなりますので、ご了承願います。メニューは通常どおりで変更ありません。

△夜のレストラン休業日▽

七月十六日／七月二十三日／七月三十日／八月六日
八月十三日／八月二十日／八月二十七日

コピーはセルフサービスで

ラウンジの受付前にフジゼロックス3970を新たに設置しました。どうぞご利用ください。セルフサービスで料金は一律一枚三〇円、縮小・拡大も可能です。コピー利用控用紙にご記入の上、受付で料金をお支払いください。

会員の著書(ご恵贈いただきました)

ジャーナリストの肖像 仲 晃
電子メディア戦略 梶山皓詠

寄贈書

メディアの権力1(ハルバースタム) サイマル出版会
友よ語らん 新潟高等学校六花会
小事典 女性史 エッソ石油



6月2日／李禹世 韓国新聞編集人協会会長(ソウル)

情報放送省次官

△訂正▽

六月号会報(第一六〇号)の『東京支社訪問—毎日放送』中、「カンチェンジュンガ登頂」の同行記者は北川敏夫氏ではなく、磯川道夫氏の誤りでした。おわびして訂正いたします。

七月の行事

7日(木) 午後2時〜3時30分 土屋正忠武蔵野市長記者会見 クラブ記者会見室

12日(火) 正午〜午後2時 真藤恒電々公社総裁昼食会 クラブ宴会場

午後2時〜3時30分 シリーズ研究会『ソ連 その実態と意図』(一) 西村文夫国際問題研究所主任研究員 クラブ記者会見室

13日(水) 午後2時30分〜3時30分 フレイザー英国産業連盟会長記者会見 クラブ記者会見室

午後5時30分〜6時30分 ラムズドルフ西独経済相記者会見 クラブ記者会見室

会報委員長 深谷憲一
委員 桂敬一 井出新六 斎藤吉史 安延久夫
連絡 長谷川・河野(事務局) 五〇三二二七二二